

令和3年度 博物館総合評価

博物館評価 実施報告書

(事業実績に関する自己点検評価)

令和4年8月

北海道博物館

令和3年度博物館総合評価 博物館評価 事後評価結果

番号	項目名	第一次自己評価	第二次自己評価
1	資料の収集・保存	B	B
2	展示	B	B
3	調査研究	B	B
4	北海道開拓の村の整備	A	B
5	教育普及事業	B	B
6	ミュージアム・エデュケーター機能の強化	B	B
7	施設及び周辺環境の整備	C	C
8	広報	B	B
9	評価制度の活用と利用者ニーズの把握	A	B
10	道民参加の推進	B	B
11	博物館ネットワーク	A	B
12	情報発信	B	B
13	人材育成機能の強化と社会貢献	B	C
14	研究成果の発信	B	B
15	アイヌ民族文化研究センターの事業	A	B
16	4つのビジョン（重点目標）	A	A

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		1	所管 G	博物館基盤 G		
項目名		資料の収集・保存				
計画策定担当者		学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		山際秀紀	鈴木琢也		3,468	3,198
予算計上		【特定重点】 ☐ 樺太記憶継承事業 [資料の保管 2,753 千円、財源：基金繰入金、時限付き (15 年間)] 【一般施策】 ☐ 北海道博物館事業費 (資料保存管理) [445 千円]				
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	【中期目標・計画④】「樺太記憶継承事業」の一環として、一般社団法人全国樺太連盟より受け入れた樺太関係資料 (以下「樺連資料」) 約 6,000 点の収蔵・整理・保管				
	一般項目	(1) 資料の収集 【ア】北海道博物館資料収集基本方針に基づく資料登録活動を継続的に実施 [年間資料情報件数見込 60 件程度、年間資料登録件数見込約 25 件程度] 【イ】収集資料の調査、整理・分類・登録の推進 (各研究 G への働きかけ) (2) 収蔵機能の強化 【ア】収蔵資料データベースのシステム更新に伴う効率的な運用 【イ】災害発生時の被災資料の受入れや保存処理などに対応できる機能と体制の整備に向けた検討 【ウ】収蔵スペースの確保に向けた検討・取組 (3) 資料保存環境の維持 【 】適切な資料保存環境の維持に向けた取組 【 】文化財保護法にもとづく公開承認施設 (国宝・重要文化財等の公開に適した施設・設備・体制を備えた施設) の変更申請及び会議・研修などへの参加 (4) 収蔵資料の利用への対応 【 】資料の貸出への対応 [年間見込 25 件 500 点程度] 【 】資料の特別観覧への対応 [年間見込 70 件 1,000 点程度] 【 】資料の模写品等使用への対応 (北海道博物館) [年間見込 120 件 300 点程度] 【 】資料の模写品等使用への対応 (開拓の村) [年間見込 40 件 150 点程度]				
前年度との主な変更点		・重点項目「樺太記憶継承事業」：昨年度の「約 6,000 点を収集」を削除し、一般項目の「収集した樺連資料の収蔵・保管」を重点項目へ移動し、「約 6,000 点の収蔵・整理・保管」へ変更。 ・収蔵資料の整理作業促進のため、「(1) 資料の収集」に「収集資料の整理、調査・分類・登録の推進」を追加。				
直近の協議会評価意見に対する取り組み		・収蔵スペースの問題について、戦略性のある将来設計を行う必要がある。 ・平成 30 年の胆振東部地震の対応を踏まえ、災害発生を前提とした機能・体制整備を進める必要がある。				

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	鈴木琢也	個別評価項目		個別評価
	B	【説明】 新型コロナウイルス感染症の感染拡大という状況のなかで、特別観覧受入や資料収集等の縮小の可能性も想定されるが、年度計画などについては適切と考えられる。	中期目標・計画との整合性		b	
			年度計画の適切性		b	
			協議会評価意見の反映		b	
			実現の可能性		b	
総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和3年4月15日		
第二次自己評価	B	【意見】 今後の新型コロナウイルス感染症の感染状況の変化の中、事業の中止や縮小などの可能性もあるが、年度計画等については概ね適切と判断される。				

令和3年度事業概要

記入日		令和4年7月24日	記入者	櫻井万里子（学芸部博物館基盤グループ主査、図書・情報発信）
業務責任者		学芸主幹	業務担当者	令和3年度博物館基盤グループ 【主査】山際秀紀（資料管理）、会田理人（展示） 【係】鈴木あすみ・亀丸由紀子・吉川佳見・大谷洋一
		鈴木琢也		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	・重点項目に掲げた樺太連資料の収蔵・保管については、収蔵庫内に温湿度データ記録装置を設置し、必要な温湿度対策を講じた結果、通年で保存環境を安定させることができた。整理に関しては、受入資料と樺太連盟作成のリスト・画像データとの照合及びリスト化を進めるとともに、関係者間で今後のデータ登録の進め方を協議した。また樺太連盟資料の一部が寄贈された稚内市の資料群との照合や、稚内市教育委員会との情報交換を実施することができた。 ・一般項目（3）に掲げた適切な資料環境の維持に向けた取組については、第1～第5収蔵庫および保存処理室の温湿度データ記録装置を収蔵庫の外から常時の監視が可能な機器に更新した。世界的な半導体の不足により必要な台数が調達できず、令和3年度はシステムの不具合により運用が不安定であった機器のみの更新となったが、樺太連盟収蔵庫の機器についても、調達可能となり次第速やかに更新を行う予定である。		
	達成・実現できなかった項目			
	当初計画になかった項目			
今後の対応策		・一般項目として掲げた資料の収集や資料保存環境の維持などの恒常的な活動は、前年度同様に実施することができた。今後も継続して取り組んでいく必要がある。 ・重点項目の樺太連資料については、資料の更なる整理を進め、目録作成に向けた具体的計画を立てる必要がある。		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	鈴木琢也	個別評価項目		個別評価
	B	【説明】 樺連資料の整理が進み、保存環境が安定したことは評価できる。恒常的な活動も含め、概ね年度計画どおりに事業が遂行されたものと判断できる。	事前評価に対する対応の適切性		b	
			年度計画の達成度		b	
			状況変化への対応の適切性		b	
			今後の対応策の適切性		b	
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	池田貴夫	評価完了日	令和4年8月24日	
	B	【意見】 グループ内に一名の欠員があり、館としての資料保存科学担当職員が不在となる年度であったため、資料の新規受け入れ等が例年より少なく、資料審査会の開催回数も少ない年度となった。やむを得ない事業もあるとはいえ、次年度における再開を課題としたい。 そのような中でも、資料の新規受け入れと保存措置を進めたこと、収蔵庫等の温湿度計測・記録装置についてより効率的な管理が可能な機器への更新を図ったことは評価できる。 樺太連盟資料については担当チームのもと資料整理に着手できたと評価できる。次年度は目録作成に向けた作業に進むことと、保管室の収蔵環境の計測及び対策の検討が課題である。				

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		2	所管 G	博物館基盤 G		
項目名		展示				
計画策定担当者		学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		会田理人	鈴木琢也		4,814 (26,425)	17,885
予算計上		☐ 【重点】樺太記憶継承事業〔資料活用 3,236 千円、財源：基金繰入金、時限付き（15 年間）〕 ☐ 【重点・新規】野幌森林公園エリア活性化事業〔展示改修委託等 5,051 千円〕 ☐ 【重点・新規】北海道博物館特別展〔特別展 9,415 千円、財源：臨時交付金〕 ☐ 北海道博物館事業費（総合展示）〔0 千円〕 ☐ 北海道博物館事業費（テーマ展）〔0 千円〕 ☐ 北海道博物館事業費（展示会等に必要な機器借上・大型プリンタ）〔183 千円〕				
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	【中期目標・計画／重点④】収集した樺連資料の展示に向けた検討 【中期目標・計画／重点②】【(2)イ】道民参加型展示の企画・推進 【(1)イ】利用者ニーズに基づいた総合展示の検証、段階的部分改修の検討・計画作成				
	一般項目	(1) 総合展示室の運営 【ア】総合展示室における展示資料の入替え推進〔年間延べ 40 点程度〕 【ア】クローズアップ展示コーナーの更新推進〔年間 7 件 27 回程度〕 【ア】アイヌ文化 Q & A（第 2 テーマ）の更新推進〔年間 3 回程度〕 【ア】総合展示 2 階出口付近の参加型展示の更新〔年間 1 回程度〕 【ア】第 4 テーマ「今とこれからをつくる」の入替え推進〔年間 3 件程度〕 【ア】学芸員紹介コーナーの入替え〔年間 1 回程度〕 【イ】総合展示の小規模改訂計画の作成と本年度改訂の実施 【イ】次年度総合展示更新実施計画（各テーマの個別資料入替、クローズアップ展示）の作成 【イ】総合展示資料目録の作成・更新 【ウ】総合展示のメンテナンスと総合展示室の管理〔随時〕 【ウ】大掃除の実施計画作成と推進〔年間 1 回〕 (2) 企画展示の開催 【ア】他機関との連携・協働、巡回展の誘致を視野に入れた次年度以降企画展実施計画の作成 【ウ】特別展の開催推進・運営〔年間 1 件程度〕 【ウ】企画テーマ展の開催推進・運営〔年間 3 件程度〕 【ウ】アイヌ民族文化研究センターが主催する巡回展の開催推進・運営〔年間 1 件程度〕 【ウ】企画展示に係る図録・リーフレットの編集・作成・刊行〔年間 4 件程度〕 【】特別展示のメンテナンスと特別展示室の管理〔随時〕				
前年度との主な変更点		・「総合展示の小規模改訂計画の作成と本年度改訂の実施」を新たに追加。 ・数年前から懸案事項となっていた「道民参加型展示の企画・推進」及び「総合展示資料目録の作成・更新」を新たに追加。 ・そのほか、これまで恒常的に実施してきた「次年度総合展示更新実施計画（各テーマの個別資料入替、クローズアップ展示）の作成」「総合展示のメンテナンスと総合展示室の管理」「大掃除の実施計画作成と推進」「他機関との連携・協働、巡回展の誘致を視野に入れた次年度以降企画展実施計画の作成」「特別展示のメンテナンスと特別展示室の管理」を頭出し。 ・業務移管により新たな業務となる「企画展示に係る図録・リーフレットの編集・作成・刊行」を追加。				
直近の協議会評価意見 に対する取り組み		・とくに該当意見なし。				

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	鈴木琢也	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 新型コロナウイルス感染症の感染拡大という状況のなかで、総合展示入替え及び企画展示の計画変更等の可能性も想定されるが、年度計画などについては適切と考えられる。			中期目標・計画との整合性	a
					年度計画の適切性	a
					協議会評価意見の反映	a
					実現の可能性	b
総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和3年4月 15 日		
第二次自己評価	A	【意見】 今後の新型コロナウイルス感染症の感染状況の変化の中、事業の中止や縮小などの可能性もあるが、年度計画等については概ね適切と判断される。				

令和3年度事業概要

記入日		令和4年8月18日	記入者	会田理人（学芸部博物館基盤グループ学芸主査・展示）
業務責任者		学芸主幹	業務担当者	令和3年度博物館基盤グループ 【主査】山際秀紀（資料管理）、会田理人（展示）、櫻井万里子（図書・情報発信） 【係】鈴木あすみ・亀丸由紀子・吉川佳見・大谷洋一
		鈴木琢也		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	・令和3年度の総合展示の小規模改訂計画を策定し、改訂事業を実施した（第2テーマ「アイヌ文化の世界」における「見て 聞いて アイヌ文化の世界」操作機器改修、第3テーマ「北海道らしさの秘密」における「北海道鳥瞰図」および解説パネル改修など）。このうち、第2テーマの機器類は、従来の接触型スイッチから非接触型のセンサーを導入することで、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策も兼ねることを狙いとして実施した。 ・樺連資料は、登録作業を集中的に行う年となったが、登録作業と並行して9点の資料を選定し、総合展示クローズアップ展示7「ロッペン鳥ってどんな鳥？」において展示・公開を行った。		
	達成・実現できなかった項目	・令和3年度は、総合展示及び特別展・企画テーマ展における新型コロナウイルス感染症拡大防止のための対応を最優先に行う必要があり、総合展示第4テーマ「今とこれからをつくる」入替え計画の策定・実施、学芸職員の研究等紹介展示計画の策定、総合展示資料目録の作成・更新を行うことができなかった。なお、退職者・新規採用者の発生にともなう学芸員紹介コーナーの更新については、実施することができた。 ・第7回特別展「あっちこっち湿地～自然と歴史をめぐる旅～」は、まん延防止等重点措置、緊急事態措置を受け、7/10（土）～12（月）、7/22（木・祝）～9/20（月・祝）が臨時休館となったことから、当初予定していた会期通りに公開することができなかった。		
	当初計画になかった項目	・北海道議会議事堂1階道民ホール（札幌市）を会場に、「開館50周年 北海道議会議事堂道民ホール展示「〈人〉と〈人〉をつなぐー50年前の懐かしの電話機ー」」を開催した（会期：11月1日（月）～11月24日（水））。 ・7月から12月にかけて、令和3（2021）年度道北地区巡回展「探してみよう！ 地域のお宝」を開催した（開催地：士別市、美深町、美瑛町）。 ・令和3・4年度に予定している北海道開拓の村旧小樽新聞社および旧近藤染舗の大規模改修工事の実施にともなう資料搬送の事前準備として、8月に両建造物内部に展示・保管している資料類の点検作業を実施した。		
今後の対応策		・総合展示室において実施中の新型コロナウイルス感染症対策については、国内・道内の感染状況を踏まえつつ、館運営ガイドラインの見直しを図りながら進めていく必要がある。 ・早急に企画展の中期計画を策定する必要がある。研究プロジェクトの成果公表、樺連資料の公開なども連動させることが必要である。 ・北海道開拓の村歴史的建造物の内部展示更新に向け、内部検討や実務作業を全館的に進める体制作りを関係グループと連携して進め、取り組んでいく必要がある。		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	鈴木琢也	個別評価項目	個別評価
	B	【説明】新型コロナ感染対策として、非接触の映像音声機器を考案・製作して総合展示改訂を行ったことは評価できる。一方、新型コロナ感染拡大にともない、特別展を1週間ほどしか公開できなかったこと、総合展示入替の一部を実施できなかったことなど、当初計画を達成できなかった部分もあるが、これは不可抗力によるものと判断できる。		事前評価に対する対応の適切性	b
				年度計画の達成度	b
				状況変化への対応の適切性	b
				今後の対応策の適切性	b
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	池田貴夫	評価完了日	令和4年8月24日
	B	【意見】 特に年度前半は新型コロナ感染拡大の影響が予想以上に大きく、長期の休館を余儀なくされ、特別展の短期間での中止等の事態が続いた。その中で感染防止対策を工夫した展示内容を準備したことや、年度後半の企画テーマ展を無事開催させ、それぞれに高い評価を得て多くの来場者があったことや総合展示の改訂を進めてきたことは評価できる。一方で展示計画の策定や「触れる展示」の回復に向けた検討、「今とこれからをつくる」の運用等の積み残された課題も見られることから、総括評価は「B」とすることが適切である。なお遺された案件の着手と実施を次年度の課題とする必要がある。			

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		3	所管 G	研究戦略 G		
項目名		調査研究				
計画策定担当者		学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		大坂 拓	水島未記		15,431	14,697
予算計上		☐ 【重点】樺太記憶継承事業〔調査研究 300 千円、財源：基金繰入金、時限付き（15 年間）〕 ☐ 北海道博物館試験研究費（外部資金活用）〔6,653 千円〕 ☐ 北海道博物館試験研究費（一般研究）〔1,710 千円〕 ☐ 北海道博物館試験研究費（地域情報集積）〔2,768 千円〕 ☐ 北海道博物館試験研究費（総合研究）〔1,484 千円〕 ☐ 北海道博物館試験研究費（北方文化研究）〔1,782 千円〕 ※アイヌ民族文化研究センターの研究プロジェクト研究費は、北海道博物館事業費（アイヌ民族文化研究センター・調査研究費）〔1,182 千円〕として計上（→「15 アイヌ民族文化研究センターの事業」を参照のこと）				
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	【中期目標・計画／重点④】「樺太記憶継承事業」（樺連資料を活用した調査研究）の実施推進〔道費による研究〕				
	一般項目	【ア】北海道の自然・歴史・文化総合研究プロジェクトの実施推進〔道費による研究：4 課題〕 【ア】アイヌ民族文化研究センターの研究プロジェクトの実施推進〔道費による研究：2 課題〕 【イ】道民・地域との協働・連携による地域情報集積プロジェクトの実施推進〔道費による研究：5 課題〕 【ア】【ウ】科学研究費による研究の実施推進〔競争的外部資金による研究：13 課題＋ α 見込み〕 【ア】【ウ】科学研究費以外の競争的外部資金による研究の実施推進〔競争的外部資金による研究：2 課題〕 【エ】北東アジアのなかの北海道研究プロジェクトの実施推進（サハリン州郷土博物館、ロイヤル・アルバータ博物館との共同研究・学術交流の推進）〔道費による研究：2 課題〕 【オ】研究課題評価の実施〔道費による研究：13 課題〕 【オ】館内定例研究報告会の実施〔年間 12 回〕				
前年度との主な変更点		・道費による研究プロジェクトの計画・実施・評価体制を強化するため「研究課題評価の実施」を新たに追加。 ※その他は博物館基盤 G から移管				
直近の協議会評価意見 に対する取り組み		・研究業績や研究プロジェクトの内容の具体的な表記や、その目標管理に関する資料が少ない、との意見を踏まえ、「研究課題評価の実施」を新たに計画に加えた。				

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	水島未記	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 コロナ禍のため、令和3年度も計画どおりに研究が進む可能性はあまり高くないが、できる範囲でそれぞれの調査研究を進めることが大事である。年度計画としては妥当であると判断できる。		中期目標・計画との整合性	a	
				年度計画の適切性	a	
				協議会評価意見の反映	a	
				実現の可能性	b	
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和3年4月 15 日	
	A	【意見】 緊急事態宣言の発令による移動の自粛などにより、各研究プロジェクトが円滑に研究を進められるかどうか未定の部分があるが、計画と評価は妥当であると判断できる。				

令和3年度事業概要

記入日		令和4年7月1日	記入者	大坂拓（学芸部研究戦略グループ学芸主査・調査研究）
業務責任者		学芸主幹	業務担当者	令和3年度研究戦略グループ 【主査】大坂拓【係】舟山直治
		水島未記		
取 り 組 み の 状 況 と 実 績	とくに 評価すべき項目	・調査研究活動全般：新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により計画どおりの調査研究活動を遂行できない研究プロジェクトが多かった中で、適宜、それに対応して研究計画を変更し、できる範囲でそれぞれの調査研究を進めた。		
	達成・実現できなかった項目	・調査研究活動全般：新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、職員の出張調査が思うように実施できず、計画どおりの調査研究活動を遂行できていない研究プロジェクトが多かった。 ・北東アジアのなかの北海道研究プロジェクトの実施：新型コロナウイルス感染症拡大による海外との往来の事実上の停止により、ロシアのサハリン州郷土博物館やカナダのロイヤル・アルバート博物館との交流（職員の招聘または派遣事業）が見送りととなった。 ・サハリン州郷土博物館との共同研究については、覚書調印、研究内容、研究メンバーの決定ができなかった。 ・定例研究報告会：開催数は9回、延べ参加人数は173人となった（当初計画では12回）。		
	当初計画になかった項目	・科学研究費による研究（当館職員が研究代表者であるもの）：令和3年度から新たに1課題が採択され、12課題となった。		
今後の対応策		・【継続課題】調査研究への道民参加については、すでに一部の研究課題で実施しているが、制度設計を含め今後検討・拡充を図っていく必要がある。 ・構連資料は次年度以降も含めて最低2年間はかけて整理作業を進め、その後実質的な調査研究の実施となる。 ・サハリン州郷土博物館、ロイヤル・アルバート博物館との共同研究については、共同の研究成果報告書の作成を念頭に置きながら、5か年の調査研究活動・交流を進めていく必要がある。 ・各研究プロジェクトの研究成果公表のあり方について、研究紀要への論文・調査概要等の執筆はもちろんのこと、企画展等における成果発表を含め、企画展の中期計画と連動した形で位置づけていく必要がある。 ・各研究プロジェクトの自己点検のあり方について、研究課題評価の実施に向けた検討を進める必要がある。		

【事後評価】

第 一 次 自 己 評 価	総括評価	学芸主幹	水島未記	個別評価項目	個別評価
	B	【説明】 コロナ禍で計画どおり進まないのは想定内なので「事前評価に対する対応の適切性」はb、「年度計画の達成度」は海外交流など実際に達成できていない事項も多いことからc、「状況変化への対応の適切性」はその中でもできる範囲の研究活動を行ったことを評価してaとした。総括評価はBと判断した。		事前評価に対する対応の適切性	b
				年度計画の達成度	c
				状況変化への対応の適切性	a
				今後の対応策の適切性	a
第 一 次 自 己 評 価	総括評価	学芸部長	池田貴夫	評価完了日	令和4年8月24日
	B	【意見】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響を踏まえ計画に沿った調査研究活動が行えない期間が長く続き、その意味での達成度は不振であったが、各研究プロジェクトとともに、柔軟な対応策をとり、少なからず調査研究を進展させたことは評価に値する。海外学術交流の再開などを含め、対応策を要する課題は多いが、着実に取り組んでいく必要がある。			

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		4	所管 G	企画 G			
項目名		北海道開拓の村の整備					
計画策定担当者		学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度	全体所要額
		東俊佑	池田貴夫		2,002 (12,778)	2,530 (70,670)	
予算計上		□開拓の村費（開拓の村老朽度調査）[2,530 千円] □文化振興事業費（開拓の村火災等発生対策費）[68,140 千円、時限付き] ※開拓の村建造物の実施設計及び改修工事は、建設部計上の開拓の村改修工事 [28,182 千円] により建設部が 執行予定。					
年 度 計 画	重点項目 (重要性・緊急性)	【中期目標・計画／重点①】【ウ】「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」（平成 30 年 12 月策定） に関わる北海道開拓の村のあり方の具体的取組の検討					
	一般項目	【ア】北海道開拓の村歴史建造物の補修工事実施設計（発注：建設部、指導・助言：博物館）[年間 2 件程度] 【ア】北海道開拓の村歴史建造物の老朽度調査[年間 2 件程度] 【ア】北海道開拓の村歴史建造物のメンテナンス [随時] 【ア】北海道開拓の村歴史的建造物等の補修計画の検討・調整・作成（計 52 棟＋インフラ） 【イ】北海道開拓の村歴史的建造物の内部展示および展示資料の管理（随時、基盤 G と連携して実施） 【イ】北海道開拓の村歴史的建造物の内部展示改修・改訂計画の検討・調整・作成（計 52 棟） 【イ】スマートフォンを利用した展示解説アプリ「ポケット学芸員」による多言語解説サービス運用・検証・改善 [6 カ国語、110 コンテンツ]					
前年度との主な変更点		・開拓の村の今後のあり方の具体的取組を検討し、必要な予算要求を行っていく必要があることから、重点項目に 新たに追加した。					
直近の協議会評価意見 に対する取り組み		・協議会委員からは、50 年先を見据えて野幌森林公園エリアの将来ビジョンを示し、具体的な検討を進めるべき との意見をいただいている。実現の可否に関わらず、館職員として、具体的な構想を議論し、あるべき理想的な 姿を取りまとめておく必要がある。					

【事前評価】

第 一 次 自 己 評 価	総括評価	学芸主幹	池田貴夫	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 上記計画は概ね妥当である。文化振興課と連携し、早急 に開拓の村維持・活用方針を定め、「構想」を実現してい くための中長期的な取組に着手していく必要がある。		中期目標・計画との整合性		a
				年度計画の適切性		a
				協議会評価意見の反映		a
				実現の可能性		a
第 二 次 自 己 評 価	総括評価	総務部長	川田宣人	評価完了日	令和3年4月 15 日	
	A	【意見】 開拓の村の現状と課題を踏まえ、計画が練られているものと判断できる。				

令和3年度事業概要

記入日		令和4年7月5日	記入者	東俊佑（総務部企画グループ学芸主査・企画調整）
業務責任者		学芸主幹	業務担当者	令和3年度企画グループ 【主査】東俊佑 【係】圓谷昂史、鈴木明世
		池田貴夫		
取 り 組 み の 状 況 と 実 績	とくに 評価すべき項目	・「野幌森林公園エリア活性化事業」の一環で、旧青山家漁家住宅を対象に、建造物のより詳細な魅力を紹介する冊子『北海道のニシン漁と青山家―旧青山家漁家住宅の魅力』を刊行し、好評を得た。		
	達成・実現できなかった項目	・展示解説アプリ「ポケット学芸員」の運用検証は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による外国人観光客の激減等により十分な検証ができないことから、実施できなかった。 ・開拓の村の今後のあり方に係る具体的取り組みの検討については、令和3年度事業である「野幌森林公園エリア活性化事業」の実施を優先させたため、今後の検討を進めるための体制を整えることができず、実施できなかった。		
	当初計画になかった項目	・とくになし		
今後の対応策		・開拓の村の今後のあり方について、建物内部の展示改修を含め、内部展示の現状を調査し、内部展示改修計画の検討を進める必要がある。		

【事後評価】

【事業計画】							
第一次自己評価	総括評価	研究主幹	甲地利恵		個別評価項目		個別評価
	A	【説明】「ポケット学芸員」の運用検証が実施できなかったのは新型コロナウイルス感染症の拡大の影響による不可抗力であり、それ以外は年度計画を適正に実施していること、開拓の村の魅力を伝える『北海道のニシン漁と青山家』の刊行を実施し好評を得たことを特に評価し、総括評価を「A」とした。			事前評価に対する対応の適切性		a
					年度計画の達成度		b
					状況変化への対応の適切性		b
					今後の対応策の適切性		b
第二次自己評価	総括評価	総務部長	島村哲也		評価完了日	令和4年7月22日	
	B	【意見】 青山家に係る冊子刊行は好評を得たものの、重点項目として設定した「開拓の村の今後のあり方に係る具体的取組みの検討」については当初予定どおりに進まなかったことから「B」とする。					

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		5	所管 G	道民サービス G		
項目名		教育普及事業				
計画策定担当者		学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		遠藤志保	三浦泰之		671	1,222
予算計上		□北海道博物館事業費（魅力あるイベント事業）[382 千円] □【重点・新規】北海道博物館特別展（記念フォーラム）[840 千円] ※解説員（一般職非常勤職員）及び会計年度任用職員の人件費は除く。				
年度 計 画	重点項目 (重要性・緊急性)	【中期目標・計画/重点①】「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」（平成 30 年 12 月策定）に関わる教育普及事業のあり方の具体的な取組の検討				
	一般項目	(1) 魅力あるイベントの充実 【ア】【イ】【ウ】一般普及行事の実施推進 [年間 50 回程度] 【ア】【イ】総合展示室等で行うイベントの実施推進 [随時] 【ア】「ちゃれんがラリー」の実施と検証・改善・拡充 [常時] 【ア】【イ】【ウ】次年度普及行事実施計画の作成 【エ】「情報デスク」を活用した交流・誘導 [常時] 【エ】解説員による総合展示の展示解説 [常時] 【エ】解説員等による展示室・はっけん広場等の展示解説活動の今後のあり方の検討 (2) 社会的ニーズに合わせた教育普及事業の充実 【ア】学校団体および一般団体を対象とした「グループレクチャー」の実施 [10 メニュー] 【ア】はっけん広場における学校団体等を対象とした「はっけんプログラム」の実施 [6 メニュー] 【イ】「ポケット学芸員」による多言語解説サービスの運用・検証・改善・拡充 【イ】展示解説器（音声ガイド）を利用した多言語解説サービスの運用・検証・改善・拡充 【イ】総合展示解説書「ビジュアル北海道」の検証と、ワークブック、新しい展示解説書の作成検討 【イ】総合展示室における子ども向け展示解説の検討 【イ】ウェブサイト内「はくぶつかんであそぼう！子どものページ」の内容検討・更新 【イ】視覚障がい者向け「さわれる博物館キット」の運用・検証・改善・拡充 【イ】オンライン事業「おうちミュージアム」の運用・検証・改善・拡充 (3) はっけん広場の運営 【ア】解説員によるはっけん広場の展示解説 [常時] 【ア】【イ】「はっけんイベント」の実施 [年間 7 メニュー] 【イ】「はっけんキット」の運用 [41 メニュー] 【ウ】学校教育用補助教材の貸出と開発の推進				
前年度との主な変更点		・これまで恒常的に実施してきた「次年度普及行事実施計画の作成」を頭出し。 ・第 3 期中期目標・計画作成の懸案事項となっている「解説員等による展示室・はっけん広場等の展示解説活動の今後のあり方の検討」を新たに追加。 ・これまでの懸案事項となっている「子ども向け展示解説の検討」「ウェブサイト内「はくぶつかんであそぼう！子どものページ」の内容検討・更新」を新たに追加。 ・一昨年度末より開始した「オンライン事業「おうちミュージアム」の運用・検証・改善・拡充」を新たに追加。 ・一昨年度末より本格的に開始した「学校教育用補助教材の貸出と開発の推進」を新たに追加。				
直近の協議会評価意見 に対する取り組み		・とくに該当意見なし。				

【事前評価】

第 一 次 自 己 評 価	総括評価	学芸主幹	三浦泰之	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 新型コロナウイルス感染症の感染拡大という状況の中、対面型・接触型の事業の中止や臨時休館による事業の縮小などの可能性も想定されるが、年度計画などについては適切と考えられる。		中期目標・計画との整合性	a	
				年度計画の適切性	a	
				協議会評価意見の反映	a	
				実現の可能性	b	
第 二 次 自 己 評 価	総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和3年4月 15 日	
A	【意見】 今後の新型コロナウイルス感染症の感染状況の変化の中、事業の中止や縮小などの可能性もあるが、年度計画等については概ね適切と判断される。					

令和3年度事業概要

記入日		令和4年5月11日	記入者	遠藤志保（学芸部道民サービスグループ研究主査・教育普及）
業務責任者		学芸主幹	業務担当者	令和3年度道民サービスグループ 【主査】青柳かつら（広報）、遠藤志保（教育普及） 【係】表溪太、田中祐未、渋谷美月、久保見幸、右代啓視
		三浦泰之		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	○新型コロナウイルス感染症拡大防止対策に伴う臨時休館期間が続いたこともあり、第7回特別展「あっちこっち湿地」関連事業として、オンライン事業「おうちミュージアム」を利用したコンテンツを公開・拡充した。 ・特別イベント「夏だ！ 海だ！ 川だ！ 湿地だ！ 全部まとめてシッチフェス」（8月15日開催予定→中止）の代替開催として、オンラインでコンテンツを紹介 ・全国各地の「おうちミュージアム」から湿地について学べる工作・ゲーム・動画などを集めて紹介する、特設ページ「特別展『あっちこっち湿地』×おうちミュージアム」を公開		
	達成・実現できなかった項目	○新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のために、館全体として「さわれる展示」や、来館者と対面するような解説・イベントなどを休止したことに伴い、次の事業は年間を通じて休止した。 ・総合展示室等で行うイベントの実施 ・「ちゃれんがラリー」の実施 ・解説員による総合展示の展示解説（特に、ハイライトツアー） ・展示解説器（音声ガイド）を利用した多言語解説サービスの運用 ・体験学習コーナーである「はっけん広場」の開室（展示解説及び「はっけんキット」の運用） ・はっけん広場における学校団体等を対象とした「はっけんプログラム」の実施 ・はっけん広場における「はっけんイベント」の実施		
	当初計画になかった項目			
今後の対応策		○新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のために休止している事業、特に「はっけん広場」の運営については、新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況を見据えつつ、現在の社会状況に合わせた運営方法を検討（入室者数の制限や事前予約制など）。加えて、そのなかでは、「おうちミュージアム」も含めたオンライン事業への展開・拡充を視野に入れた検討も必要。		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	三浦泰之	個別評価項目	個別評価
	B	【説明】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響によって休止せざるを得なかった事業もあるなど、年度計画とおりに進まなかったが、感染症対策を徹底した上での事業運営や、「おうちミュージアム」の取組の発展的な継続など、その時々状況に応じて、最低限の事業展開は果たせたのではないかと考える。		事前評価に対する対応の適切性	b
				年度計画の達成度	b
				状況変化への対応の適切性	b
				今後の対応策の適切性	b
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	池田貴夫	評価完了日	令和4年8月24日
	B	【意見】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響のため幾つかの事業の休止・延期など年度計画の一部が未実施であるが、当初の想定を超える長期休館等によるやむを得ないものと理解できる。全体としては感染症対策を徹底した事業運営や、「おうちミュージアム」の取組を継続し新たな展開も行うなど、状況に応じた事業展開を行っていることから、総合評価は十分に「B」を満たすものと判断する。さらに今後に向けて休止している事業の段階的回復を検討している点はプラスの評価要素である。			

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		6	所管 G	道民サービス G		
項目名		ミュージアムエデュケーター機能の強化				
計画策定担当者		学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		遠藤志保	三浦泰之		0	0
予算計上						
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	【ウ】新学習指導要領を踏まえた小学校、中学校、高等学校、特別支援学校児童・生徒の主体的・対話的で深い学びをサポートするための具体的取組の検討				
	一般項目	【ア】文化庁や北海道博物館協会（およびそのブロック組織）等において実施されるミュージアムエデュケーター養成関連研修会への職員派遣の調整 [都度実施] 【ア】博物館職員の教育普及活動向上に必要な館内研修会等の企画の検討 【ア】解説員研修の実施 [都度実施] 【イ】学校団体の博物館利用を促進するための学校教職員向け「博物館教育プログラム研修会」の実施 [年間 1 回、8 月、対象：学校教員等] 【イ】学校団体の博物館利用を促進するための学校教職員、及び旅行会社向け下見対応の実施 [年間 30 件程度] 【イ】学校団体の博物館利用を促進するための「学校利用ガイド」の編集・刊行 [年 1 回] 【イ】学校団体向けワークシートの運用・検証・改善・拡充				
前年度との主な変更点		・新規検討事項として「新学習指導要領を踏まえた小学校、中学校、高等学校、特別支援学校児童・生徒の主体的・対話的で深い学びをサポートするための具体的取組の検討」を追加した。				
直近の協議会評価意見に対する取り組み		・ミュージアムエデュケーター関連の研修で得た知識等の共有の仕組みを検討する必要があるとの意見を踏まえ、「博物館職員の教育普及活動向上に必要な館内研修会等の企画の検討」を計画に新たに追加した。				

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	三浦泰之	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 新型コロナウイルス感染症の感染拡大という状況の中、対面型・接触型の事業の中止や臨時休館による事業の縮小などの可能性も想定されるが、年度計画などについては適切と考えられる。	中期目標・計画との整合性		a	
			年度計画の適切性		a	
			協議会評価意見の反映		a	
			実現の可能性		b	
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	年 月 日	
	A	【意見】 今後の新型コロナウイルス感染症の感染状況の変化の中、事業の中止や縮小などの可能性もあるが、年度計画等については概ね適切と判断される。				

令和3年度事業概要

記入日		令和4年5月11日	記入者	遠藤志保（学芸部道民サービスグループ研究主査・教育普及）
業務責任者		学芸主幹	業務担当者	令和3年度道民サービスグループ 【主査】青柳かつら（広報）、遠藤志保（教育普及） 【係】表溪太、田中祐未、渋谷美月、久保見幸、右代啓視
		三浦泰之		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	○次の事業は、新学習指導要領を踏まえた学校の学びをサポートし、博物館を学校教育で利用してもらうために重点的に実施する取組のひとつであることから、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策に伴う臨時休館期間となった7月～9月も含めて継続的に実施。年度計画よりも多くの利用があった。 ・教員及び旅行会社向けの下見対応〔計画：年間30件程度→実績：年間91件〕		
	達成・実現できなかった項目	○新型コロナウイルス感染症拡大防止対策に伴う臨時休館期間が続いたことから、学校利用促進を目的とした次の事業は実施しなかった。 ・道内の学校教職員を対象とした、北海道博物館及び北海道開拓の村の利用方法等を学ぶための「博物館教育プログラム研修会」の開催。 ○新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、展示場における「さわれる展示」など展示の一部を一時休止しており、展示再開・改訂等の見通しが立たなかったことから、総合展示を紹介することを目的としている次の事業は実施しなかった。 ・学校団体向けワークシートの検証・改善・拡充。 ・学校団体の博物館利用を促進するための「学校利用ガイド」の編集・刊行。		
	当初計画になかった項目	○新型コロナウイルス感染症拡大防止対策に伴って実施できなかった事業の代替として、次のとおりに実施した。 ・道内の学校教職員を対象とした、北海道博物館及び北海道開拓の村の利用方法等を学ぶための「博物館教育プログラム研修会」を冬休み期間である1月に開催。新学習指導要領ではアイヌに関する学習の充実も挙げられていることから、研修項目として「北海道博物館の利用方法（アイヌ文化学習を中心に）」も取り上げた。 ・学校団体の博物館利用を促進するための「学校利用ガイド」については、過年度に作成した冊子及びPDFを継続利用した。		
今後の対応策		○ミュージアムエデュケーター機能を強化するための取組 ・【継続課題】館外での研修成果について、資料等の回覧だけでなく、より効果的に受講成果を共有する機会を設ける方法の検討・実施。 ○新学習指導要領を踏まえた小学校、中学校、高等学校、特別支援学校児童・生徒の主体的・対話的で深い学びをサポートし、博物館を教育的な観点から利用してもらうための取組 （いずれも新型コロナウイルス感染症の感染拡大（終息）を含め、現在の社会状況に合わせた検討が必要） ・学校団体向けワークシートの内容を改訂・拡充。 ・教員向け研修会・教員及び旅行会社向けの下見対応といった場を利用した、学校（教員）からのニーズの把握。		

【事後評価】

【学校評価】						
第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	三浦泰之	個別評価項目		個別評価
	B	【説明】 学校教育における主体的・対話的で深い学びをサポートするための 具体的取組の検討に欠かせない要素である、「学校団体向けワーク シートの検証・改善・拡充」は着手できなかったが、学校側の 下見には十分に対応し例年よりも学校側のニーズを把握できた、 など、計画はおおむね達成することができたと思う。	事前評価に対する対応の適切性		b	
			年度計画の達成度		b	
			状況変化への対応の適切性		a	
			今後の対応策の適切性		b	
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	池田貴夫	評価完了日	令和4年8月24日	
	B	【意見】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響を踏まえて年度計画の一部を未実施としているが、妥当な選択と判断であ ると認められる。学校団体の下見の積極的な受け入れや、教員研修の冬期実施など、状況に応じた事業展開を行っ ていることも評価でき、総合評価は十分に「B」を満たすと判断する。研修成果の共有を図る取組などについては、 全館的な課題としても位置づけておくべきと考える。				

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		7	所管 G	総括 G		
項目名		施設及び周辺環境の整備				
計画策定担当者		主査	主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		三國正雄	川田宣人		356,084	359,629
予算計上		☐ 北海道博物館管理運営費 [346,643 千円、指定管理負担金 (博物館、開拓の村、自然ふれあい交流館、森林公園含む)] ☐ 野幌森林公園管理費 (庁舎等維持費) [3,986 千円] ☐ 野幌森林公園施設整備費 [9,000 千円]				
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	【中期目標・計画/重点①】【(3)】「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」(平成 30 年 12 月策定)に関わる具体的取組の検討				
	一般項目	(1) 館内施設の整備と活用 【ア】オリジナルグッズの開発など博物館の魅力アップの取組 【ア】老朽化した施設・設備の補修に向けた検討・取組 【ア】年齢、母語、障がいの有無などを問わず快適に利用できるユニバーサル・ミュージアムをめざすための総合展示室その他館内における施設・設備の整備に向けた検討・取組 【イ】屋上スカイビューの特別開放を実施 [年間 10 回] 【イ】記念ホールの開放 [随時] (2) 周辺環境の整備 【ア】JR 北海道、JR 北海道バス、指定管理者等と連携し、アクセス向上に向けた検討・取組 【イ】サインの統一化に向けた検討・取組 【ウ】野外展示の具体化に向けた検討・取組 【 】野幌森林公園内の危険木の処理および老朽化した設備の改修 【 】平成 30 年度の台風被害や令和元年度のヒグマ出没等をふまえ、野幌森林公園の健全性と安全性の確保に向けた検討・取組 (3) 野幌森林公園内施設との一体的な取組の推進 【 】関係機関との連絡会議・協議会への参加				
前年度との主な変更点		・とくに変更なし。				
直近の協議会評価意見 に対する取り組み		・とくに該当意見なし。				

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	主幹	川田宣人	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 令和 2 年度同様、新型コロナウイルス感染症拡大の状況が続き、施設の活用等の項目において事業縮小の可能性も想定されるが、年度計画については適切と考える。	中期目標・計画との整合性		a	
			年度計画の適切性		a	
			協議会評価意見の反映		a	
			実現の可能性		b	
総括評価	総務部長	川田宣人	評価完了日	令和 3 年 4 月 15 日		
第二次自己評価	A	【意見】 同上				

令和3年度事業概要

記入日		令和4年6月30日	記入者	藤田竜太（総務部総括グループ主査・総務）
業務責任者		主幹	業務担当者	令和3年度総括グループ 【主幹】川田宣人、由水正明（調整） 【主査】三國正雄（総務）、三井義也（調整・公園利用）、鈴木芳彦（調整・施設管理） 【係】西尾千秋、金子未来
		川田宣人		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	・2021年の重点事業の一環として、建築業界賞や建築学会賞（作品賞）などを受賞した建築物としての価値や魅力を広く発信するための取組として、旧開拓記念館の50周年を記念して、建物に焦点を当てたフォトコンテストを開催し、併せて記念ホール等の一般開放も実施。 ・また、周辺環境も含め建設当時の設計理念や建築物としての意義や特徴などを印象的かつ分かりやすく伝えるためのショートムービーの制作や管内の見どころを紹介するリーフレット「たてものみどころガイド」を作成するなど、施設及び周辺環境を活用した事業に取り組んだ。		
	達成・実現できなかった項目	・新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、5月1日から9月末までの期間、断続的に休館措置をとったことから、第7回特別展「あっちこっち湿地」などの諸事業の休止等が続いた。 ○未達成の取組事項 （1）館内施設の整備と活用 【ア】オリジナルグッズの開発など博物館の魅力アップの取組 【ア】年齢、母語、障がいの有無などを問わず快適に利用できるユニバーサル・ミュージアムをめざすための総合展示室その他館内における施設・設備の整備に向けた検討・取組 【イ】屋上スカイビューの特別開放を実施【計画年間10回→実績年間1回】 （2）周辺環境の整備 【ア】JR北海道、JR北海道バス、指定管理者等と連携し、アクセス向上に向けた検討・取組 【イ】サインの統一化に向けた検討・取組 【ウ】野外展示の具体化に向けた検討・取組		
	当初計画になかった項目	・上記「特に評価すべき項目」欄に記載したとおり。		
今後の対応策		【継続課題】 ○アメニティ施設の充実や新たなオリジナルグッズの開発については、指定管理者や協力企業等との協議・調整等が必要となるが、文化資源を活用した商品開発は開発予算や開発後の販売ルートが必要となることから継続して検討することが必要。 ○ユニバーサル・ミュージアムをめざした総合展示室等の整備や記念ホールなどの施設の利活用のほか、交通事業者等と連携したアクセスの向上等に関しては、道として策定した「ほっかいどう歴史・文化・自然「体感」交流空間構想」を踏まえ、国（文化庁）の支援制度の活用も視野に入れながら、関係機関と協議検討するなど、中期的な継続課題として取り組むことが必要。 ○建設から50年を迎えた博物館のほか、開拓の村や自然ふれあい交流館の施設や設備の老朽化に関しては、必要な修繕を実施できるよう今後とも建設部等本庁関係部局との連携・協議を継続していくことが必要。		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	主幹	島村 哲也	個別評価項目	個別評価
	C	【説明】 休館措置によりやむを得ず休止となった事業もあるが、この影響が少ない空間構想や周辺環境の整備に係る検討についても目立った進展が見られない。		事前評価に対する対応の適切性	b
				年度計画の達成度	c
				状況変化への対応の適切性	c
				今後の対応策の適切性	b
第二次自己評価	総括評価	総務部長	島村 哲也	評価完了日	令和4年7月27日
	C	【意見】 同上			

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		8	所管 G	道民サービス G		
項目名		広報				
計画策定担当者		学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		青柳かつら	三浦泰之		663	599
予算計上		□北海道博物館事業費（広報サービス事業費）[599 千円] ※上記は印刷製本費。発送費は、野幌森林公園管理費（庁舎等維持費）のなかの通信運搬費 [540 千円] より発送分を使用。				
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	【(1)ア】修学旅行その他団体旅行の誘致に向けた検討・取組				
	一般項目	(1) 広報活動の強化 【ア】報道機関等への対応（新聞、雑誌、テレビ、ラジオほか）[掲載・報道見込：年間延べ 400 件程度] 【ア】報道機関等へ戦略的に働きかけていく広報活動の実施 【ア】各種広報媒体への学術的な情報や知見の提供（協力、寄稿、出演等）の推進 [年間延べ 100 件程度] 【ア】招待講演（講座・講演会）等への職員派遣に伴う道民と直に接する広報活動の推進 【ア】ICT を活用した広報（ウェブサイト、Twitter 等による展示、教育普及、その他博物館活動に関する情報の発信）の実施（年間 200 回程度） 【ア】広報誌『森のちゃれんがニュース』の編集・発行・配布（年間 4 回（季刊）刊行） 【ア】『行事あんない』の編集・発行・配布（年間 2 回（前期・後期）刊行） 【ア】特別展ポスター、チラシの編集・作成・配布（年間 1 回） 【ア】企画テーマ展ポスター、チラシの編集・作成・配布（年間 3 回） 【ア】特別イベント等のポスター、チラシの編集・作成・配布（年間 1 回程度） 【ア】各種印刷・刊行物の発送・配布（年間 7 回程度） 【ア】海外に向けた情報発信の強化に向けた検討 【イ】愛称やロゴマークの積極的活用 【イ】愛称およびロゴマークの浸透に向けた取組に連動し、北海道博物館の建物そのものが「森のちゃれんが」として見て美しい建物として認知され、ブランド化されていくための検討 (2) 他機関との連携による広報活動の強化 【 】北海道生涯学習協会と連携した一般普及行事の「道民カレッジ連携講座」への登録申請（年間 2 回） 【 】他機関との連携による広報活動の実施（年間 5 件程度）				
前年度との主な変更点		・これまで恒常的に実施していた業務を計画に頭出しした。 ・赤れんが庁舎のリニューアル事業と連動した北海道博物館の PR は、令和 3 年度に実施予定がないので削除した。 ・新型コロナウイルス感染症拡大の影響により落ち込んだ団体利用を回復させることを見込んで（コロナ収束を見据え）、「修学旅行その他団体旅行の誘致に向けた検討・取組」を重点目標に設定した。				
直近の協議会評価意見 に対する取り組み		・SNS を活用した広報強化のため、広報主担当の事務スタッフの配置、もしくは学芸員・事務職員全体による交代・分担体制の検討を進めるようにとの意見を踏まえ、今年度より広報担当職員を 3 名→4 名体制とした。				

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	三浦泰之	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 新型コロナウイルス感染症の感染拡大という状況の中、対面型・接触型の事業の中止や臨時休館による事業の縮小などの可能性も想定されるが、年度計画などについては適切と考えられる。		中期目標・計画との整合性		a
				年度計画の適切性		a
				協議会評価意見の反映		a
				実現の可能性		b
総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和 3 年 4 月 15 日		
第二次自己評価	A	【意見】 今後の新型コロナウイルス感染症の感染状況の変化の中、事業の中止や縮小などの可能性もあるが、年度計画等については概ね適切と判断される。特に速報性の高い SNS 等を通じた広報はコロナの状況で変化する事業の周知で重要と考える。				

令和3年度事業概要

記入日		令和4年7月14日	記入日	青柳かつら（学芸部道民サービスグループ学芸主査・利用促進）
業務責任者		学芸主幹	業務担当者	令和3年度道民サービスグループ 【主査】青柳かつら（利用促進）、遠藤志保（教育普及） 【係】表溪太、田中祐未、渋谷美月、久保見幸、右代啓視
		三浦泰之		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	・愛称やロゴマークの積極的活用、美しい建物としての認知：重点予算事業による、当館の建物の魅力を伝えるショートムービー製作、森のチャレンジが50周年フォトコンテスト、森のチャレンジが50年特別イベント（企画グループ所管）に関連した広報を実施したところ、新聞・ミニコミ紙に掲載され、当館の愛称や建物の魅力の普及が図られた。フォトコンテスト関連のツイッターをきっかけに、美しい博物館・美術館として認知され、取材依頼があり、当館紹介記事がムック本に掲載されるといった波及効果もあった。		
	達成・実現できなかった項目	・修学旅行その他団体旅行の誘致に向けた検討・取組：当年度は新型コロナウイルス感染症拡大・長期の臨時休館を受けて積極的な広報活動が不可となり、今後の収束状況を見据え、改めて検討することとした。 ・海外に向けた情報発信強化：同上。		
	当初計画になかった項目	・コロナ禍に対応したウェブコンテンツの充実化：①「特別展「あっちこっち湿地」× おうちミュージアム」として、全国各地の「おうちミュージアム」から湿地について学べる工作・ゲーム・動画などを集めて紹介するページを作成し普及を図った。②中止となった第7回特別展開連野外イベントを、「シッチフェス！」としてオンライン開催した。これを受け、同コンテンツのうち、動画2本を、当館YouTubeチャンネルにて公開した。		
今後の対応策		・【継続課題】修学旅行その他団体旅行の誘致に向けた検討・取組については、引き続き進めていく必要がある。 ・【継続課題】愛称やロゴマークの積極的活用、北海道博物館の建物の認知については、これらが効果的に盛り込まれたショートムービー「建物に描かれた想い」の活用も含め、引き続き進めていく必要がある。 ・新型コロナウイルス感染症拡大の影響により離れた博物館利用者を取り戻すべく、感染症収束の状況を見据えながら、広報活動を強化していく必要がある。		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	三浦泰之	個別評価項目	個別評価
	B	【説明】 新型コロナの感染拡大の中、重点項目として掲げていた「修学旅行その他団体旅行の誘致に向けた検討・取組」は行わなかったが、通常の広報業務に加え、重点予算事業による愛称・ロゴマークの普及、ウェブコンテンツの充実など、新たに展開した事業も多く、計画はおおむね達成することができた考える。		事前評価に対する対応の適切性	b
				年度計画の達成度	b
				状況変化への対応の適切性	a
				今後の対応策の適切性	b
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	池田貴夫	評価完了日	令和4年8月24日
	B	【意見】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響を踏まえ計画の一部を未実施としているが、妥当な選択と判断と認められる。当年度内の館の周年事業等についての情報発信などに積極的に取り組むなど、状況に応じた事業展開を行っていることは評価できる。総合評価は「B」とすることが妥当と判断する。			

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		9	所管 G	企画 G		
項目名		評価制度の活用と利用者ニーズの把握				
計画策定担当者		学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		東俊佑	池田貴夫		416	416
予算計上		【環境生活部総務課計上】 □総務管理諸費（各種審議会経費：北海道立総合博物館協議会）[416 千円]				
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	【イ】 出口調査・追跡調査によるオーディエンス・リサーチ（利用者調査）の実施 [年 1 回程度]				
	一般項目	(1) 評価制度の活用 【ア】 前年度の事業実績の取りまとめの推進 【ア】 「博物館総合評価」における自己評価の実施推進・運営 [事前評価 1 回、事後評価 1 回] 【ア】 『要覧』の編集・刊行 [年 1 回] 【イ】 「北海道立総合博物館協議会」による調査審議、外部評価、自己評価、オーディエンス・リサーチに基づいた事業改善ならびに次年度年度計画の作成 【ウ】 「北海道立総合博物館協議会」の開催（年間 2 回）による調査審議と外部評価の実施推進・運営 【ウ】 「北海道立総合博物館協議会アイヌ民族文化研究センター専門部会」の開催（年間 1 回）による調査審議と外部評価の実施推進・運営 (2) 利用者ニーズの把握 【イ】 特別展、企画テーマ展、アイヌ文化巡回展期間の来館者アンケート調査による利用者ニーズの把握および利用者満足度の測定・分析 【イ】 利用者満足度調査による利用者ニーズの把握および利用者満足度の測定・分析（秋期の一定期間実施） 【イ】 解説員活動日誌による利用者ニーズ・意見の把握・分析（開館日毎日） 【イ】 図書室業務日誌による利用者ニーズ・意見の把握・分析（開館日毎日） 【イ】 アイヌ文化 Q & A（総合展示室第 2 テーマ）による利用者ニーズ・意見の把握・分析（開館日毎日） 【イ】 指定管理者日報による利用者ニーズ・意見の把握・分析（開館日毎日） 【イ】 口頭・電話・メール・手紙等の受理による利用者ニーズ・意見の把握（開館日毎日）				
前年度との主な変更点		・令和2年度に実施できなかった「オーディエンス・リサーチ（利用者調査）の実施」を重点項目とした。 ・令和3年度から新たに実施する「「博物館総合評価」における自己評価の実施推進・運営」を新たに追加した。 ・『要覧』の編集・刊行を頭出しした。				
直近の協議会評価意見に対する取り組み		・ガバナンスの姿が見えない、評価制度や協議会のあり方を見直すべきとの意見を踏まえ、令和2年度に評価制度の見直しを行い、令和3年度より新たな評価の仕組みのもと、博物館の自己点検評価、協議会評価（外部評価）を行うこととした。				

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	池田貴夫	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 新たな評価制度のもと、実績取りまとめ→要覧作成→自己点検評価→協議会評価→次年度年度計画作成のサイクル確立が令和3年度の大きな課題である。オーディエンス・リサーチはコロナ禍のため実現可能性が不透明。		中期目標・計画との整合性	a	
				年度計画の適切性	a	
				協議会評価意見の反映	a	
				実現の可能性	b	
第二次自己評価	総括評価	総務部長	川田宣人	評価完了日	令和3年4月 15 日	
	A	【意見】 協議会意見を踏まえ、適切に計画が作成され、事前評価が適切に行われていると判断できる。				

令和3年度事業概要

記入日		令和4年7月5日	記入者	東俊佑（総務部企画グループ学芸主査・企画調整）
業務責任者		学芸主幹	業務担当者	令和3年度企画グループ 【主査】東俊佑 【係】圓谷昂史、鈴木明世
		池田貴夫		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	・『要覧』の内容構成を見直し、「第2期中期目標・計画」の実績報告書に見合った体裁に再編集し、『北海道博物館要覧』第6号を刊行した。 ・第2期中期・目標計画における新たな評価制度（博物館総合評価）の下での自己点検評価及び協議会評価を実施した。		
	達成・実現できなかった項目	・新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のための臨時休館や感染対策を踏まえ、オーディエンスリサーチ（利用者調査）を実施することはできなかった。 ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大（緊急事態宣言発令による臨時休館措置）により「令和3年度第1回北海道立総合博物館協議会」の開催が遅れたことなどにより、「令和3年度アイヌ民族文化研究センター専門部会」を開催することができなかった（前年度開催延期となっていた「令和2年度アイヌ民族文化研究センター専門部会」も臨時休館や札幌市とそれ以外の地域との移動自粛制限等の理由により開催できなかった）。		
	当初計画になかった項目	・とくになし。		
今後の対応策		・前年度実績のとりまとめ、要覧の編集・刊行、自己点検評価の実施、博物館協議会の開催（協議会評価の実施）、次年度計画の作成という年度内の一連の流れについてスケジュールを定め、そのスケジュールから遅延することなく運用していくことが令和4年度以降の課題である。		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	研究主幹	甲地利恵	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 達成実施できなかった項目の原因には新型コロナウイルス感染症拡大の影響という不可抗力もあるので「c」とはせず、また、実績のとりまとめ（要覧作成）・評価・協議会開催・次年度計画の作成までの一連の流れを整理・改善し、実施運用にこぎ着けたことは大いに評価できることから、総括評価としては「A」とした。		事前評価に対する対応の適切性		a
				年度計画の達成度		b
				状況変化への対応の適切性		b
				今後の対応策の適切性		b
第二次自己評価	総括評価	総務部長	島村哲也	評価完了日	令和4年7月22日	
	B	【意見】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により専門部会及び利用者ニーズの把握については未実施であるが、他の項目についてはおおむね計画どおり実施したため「B」とする。				

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		10	所管 G	企画 G		
項目名		道民参加の推進				
計画策定担当者		学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		東俊佑	池田貴夫		0	0
予算計上						
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	【中期目標・計画/重点②】【ア】【イ】道民参加型学習サークル活動の推進（各研究 G へのサークル立ち上げへの働きかけ） 【中期目標・計画/重点②】【ア】【イ】小中学生以下の子どもを対象としたジュニアクラブ活動の推進（各研究 G へのサークル立ち上げへの働きかけ） 【中期目標・計画/重点②】【ア】第 3 期中期目標・計画期におけるボランティア活動の導入を含めた総合展示室、はっけん広場、図書室等での利用者対応組織の検討（道民サービス G と連携し、検討ワーキンググループを立ち上げ） 【中期目標・計画/重点】【ウ】北海道博物館の各種活動に協働参画しかつ館長の諮問に応える支援組織（ミュージアム・パートナー：旧開拓記念館のミュージアム・メイト）の整備に向けた検討				
	一般項目	【ア】【イ】道民参加型学習サークル活動の推進（道民サービス G と連携） 【ア】博物館基盤整備に係るボランティア活動の推進（博物館基盤 G と連携） 【ア】道民参加型調査研究の推進（研究戦略 G と連携） 【ア】道民参加型展示の推進（博物館基盤 G と連携） 【ア】ウェブサイト内「博物館の活動に参加しよう」の内容検討・更新 【イ】博物館実習生が企画・作成する展示コーナーの運営（年間夏期 1 回実施）				
前年度との主な変更点		・道民参加を促進するため、サークル立ち上げの推進、ジュニアクラブ活動の推進、ボランティア活動導入検討、支援組織整備検討を重点項目として新たに追加した。				
直近の協議会評価意見に対する取り組み		・第 1 期中期目標・計画期に大きな進展が見られなかった道民参加型組織の整備について、本格実施を第 3 期（令和 7 年度～）と見据えながら、この第 2 期中に試行的にいくつかの活動をスタートさせるべく、令和 3 年度計画の重点項目にいくつかの項目を顕出した。				

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	池田貴夫	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 コロナ禍のため、道民参加型活動の推進は困難な状況であり、計画実現の可能性は決して高くないが、「高い目標を掲げて試験的にスタートさせてほしい」との協議会意見を踏まえた計画であると判断する。	中期目標・計画との整合性		a	
			年度計画の適切性		a	
			協議会評価意見の反映		a	
			実現の可能性		b	
総括評価	総務部長	川田宣人	評価完了日	令和 3 年 4 月 15 日		
第二次自己評価	A	【意見】 実現可能性は決して高くはないが、協議会での意見は計画に反映されていると判断できる。				

令和3年度事業概要

記入日		令和4年7月18日	記入者	東俊佑（総務部企画グループ学芸主査・企画調整）
業務責任者		学芸主幹	業務担当者	令和3年度企画グループ 【主査】東俊佑 【係】圓谷昂史、鈴木明世
		池田貴夫		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	・新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、4～9月のほとんどが臨時休館となったが、10月以降は道民参加型の学習サークル活動「ちゃれんが古文書クラブ」や「図書室支援員」の活動を再開させることにより、推進を図ることができた。		
	達成・実現できなかった項目	・道民参加型の調査研究や展示などの新たな取組については、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、実施できなかった。 ・重点項目に掲げた第3期中期目標・計画期における利用者対応組織の検討、各種活動に協働参画し、かつ館長の諮問に応える支援組織の整備に向けた検討については、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が続くなかで先が見通せず、方向性の取りまとめや具体的な検討を進められなかった。 ・ウェブサイト内「博物館の活動に参加しよう」の内容検討・更新については、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が続くなかで、道民参加型活動の積極的なPRをするべき状況ではないと判断し、2021年度は行わなかった。		
	当初計画になかった項目	・特になし。		
今後の対応策		・新型コロナウイルス感染症の感染拡大の状況や今後の野幌森林公園エリアの活性化に向けた取組などを踏まえ、当館の道民参加のあり方を検討していくことが課題である。		

【事後評価】

【事後評価】						
第一次自己評価	総括評価	研究主幹	甲地利恵	個別評価項目		個別評価
	B	【説明】達成実現できなかった項目もあり「年度計画の達成度」は「c」。ただし約5ヶ月臨時休館が続く中で具体プランを実施しにくかったことは不可抗力といえる。その中で「古文書クラブ」「図書室支援員」の活動を再開・推進できており「事前評価への対応」「状況変化への対応」は概ね適正と考えられ、総括評価は「B」とした。		事前評価に対する対応の適切性		b
				年度計画の達成度		c
				状況変化への対応の適切性		b
				今後の対応策の適切性		b
第二次自己評価	総括評価	総務部長	島村哲也	評価完了日	令和4年7月22日	
	B	【意見】臨時休館の影響で、具体化や実施出来なかった項目もあるが、そのほかはおおむね計画どおり実施できたため、「B」とする。				

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		11	所管 G	企画 G		
項目名		博物館ネットワーク				
計画策定担当者		学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		東俊佑	池田貴夫		75	70
予算計上		【環境生活部総務課計上】 ☐ 総務管理諸費（各種負担金：公益財団法人日本博物館協会会費）[55 千円] ☐ 総務管理諸費（各種負担金：北海道博物館協会会費）[15 千円] ※北海道博物館協会の運営（事務局館）に係る経費は、北海道博物館協会から支出。				
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	【ア】全国博物館大会（11 月 17～18 日開催予定）の事務局館としての庶務 【中期目標・計画／重点③】【(2)ア】国立アイヌ民族博物館との連携による北海道内博物館の活性化に向けた検討 （道内博物館への誘客促進、今後の連携・協働・役割分担についての協議）（アイヌ民族文化研究センターと連携）				
	一般項目	(1) 各種博物館団体との連携 【ア】日本博物館協会との連携・協力、北海道支部の運営 【ア】全国歴史民俗系博物館協議会との連携・協力 【イ】北海道博物館協会との連携・協力 【イ】北海道博物館協会の運営（担当職員が事務局を兼務して執行） 【イ】北海道博物館協会学芸職員部会への職員の積極的参画の促進 (2) 博物館交流の促進 【ア】周辺施設とのネットワーク事業の実施 [年間 3 件程度] 【ア】外部主催イベントへの参画 [年間 3 件程度] 【イ】北海道博物館協会と連携した学芸職員対象の研修会の開催検討（学芸職員部会との連携）				
前年度との主な変更点		・令和 3 年度のための業務として「全国博物館大会の事務局館としての庶務」を重点項目とした。 ・第 2 期中期目標・計画の(1)ーイを実現するため「北海道博物館協会学芸職員部会への職員の積極的参画の促進」を新たに加えた。 ・第 2 期中期目標・計画の(2)ーイを実現するため「北海道博物館協会と連携した学芸職員対象の研修会の開催検討」を新たに加えた。				
直近の協議会評価意見 に対する取り組み		・とくに該当意見なし。				

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	池田貴夫	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 コロナ禍のため、博物館大会や研修会の開催実現が不透明であるが、従前とおり各種博物館団体や博物館交流を促進していくことが大事である。全国博物館大会を成功に導くことが令和 3 年度の重要課題である。	中期目標・計画との整合性		a	
			年度計画の適切性		a	
			協議会評価意見の反映		a	
			実現の可能性		b	
第二次自己評価	総括評価	総務部長	川田宣人	評価完了日	令和 3 年 4 月 15 日	
	A	【意見】 当館の使命の一つである北海道の中核的な博物館としての役割を果たしていくことが重要である。年度計画は適切につくられ、適切に自己点検がなされているものと判断できる。				

令和3年度事業概要

記入日		令和4年7月21日	記入者	尾曲香織（企画グループ学芸主査・中核的博物館）
業務責任者		学芸主幹 研究主幹	業務担当者	令和3年度企画グループ 【主査】山田伸一 【係】尾曲香織
		池田貴夫 甲地利恵		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	・全国博物館大会（11月17～18日開催予定）の事務局館として調整・庶務にあたり、感染症対策を徹底しながら大会を開催・運営することができた。主催者である日本博物館協会からも、当館を中心とした北海道博物館協会ほかによる運営協力について好評を得た。		
	達成・実現できなかった項目	・（2）【イ】「北海道博物館協会と連携した学芸職員対象の研修会の開催検討」については、新型コロナウイルス感染症拡大の影響も考慮したことから実施に至ることはできなかった。		
	当初計画になかった項目	特になし		
今後の対応策		・これまでどおり、北海道の中核的博物館としての役割を果たしていく必要がある。 ・アイヌ民族文化研究センターを中心に、国立アイヌ民族博物館との連携強化を図り、道内博物館の活性化を図っていく必要がある。		

【事後評価】

【事業計画】						
第一次自己評価	総括評価	研究主幹	甲地利恵	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】実施できなかった項目もあるが新型コロナウイルス感染症拡大の影響という不可抗力であったこと、重点項目の「全国博物館大会の事務局館としての庶務」については、主催者（日博協）及び道博協役員会や文化振興課ほかとの連絡調整を綿密に行い達成できたことは特に評価できることから、総括評価としては「A」とした。		事前評価に対する対応の適切性		a
				年度計画の達成度		b
				状況変化への対応の適切性		b
				今後の対応策の適切性		b
第二次自己評価	総括評価	総務部長	島村哲也	評価完了日	令和4年7月22日	
	B	【意見】 全国博物館大会の開催協力は評価できるが、年度計画の一環として事前に分かっていたことであること、新型コロナウイルスの影響で実施できなかったこともあることから、おおむね適正で「B」とする。				

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		12	所管 G	博物館基盤 G		
項目名		情報発信				
計画策定担当者		主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		櫻井万里子	鈴木琢也		7,642 (8,322)	5,338 (6,018)
予算計上		□文化振興事業費（北海道博物館事業費：情報システム整備費、総合政策部計上）[5,338 千円] ※図書購入費は、北海道博物館試験研究費（情報集積推進事業）のなかの図書購入費 [680 千円] を充当				
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	【(1)ア】収蔵資料データベースに登録する情報（デジタルカメラによる写真撮影、ネガフィルムのスキャン、資料情報内容の調査等）の拡充推進（各研究 G への働きかけ） 【(1)ア】収蔵図書（道内外の博物館展示会図録等を含む）の整理とデータベース登録 【(1)ア】北海道博物館（旧開拓記念館、旧センター含む）刊行物（特別展図録、研究紀要、ニュースレター等）のスキャンによるアーカイブス化の検討 【(1)イ】収蔵資料データベース、収蔵図書データベース、刊行物アーカイブスの公開のあり方検討				
	一般項目	(1) 情報発信機能の強化 【ア】情報システム（収蔵資料データベース）の保守・管理 【イ】情報システムを活用した関係機関（道内外博物館、文書館、図書館等）とのネットワーク構築に向けての検討（道民サービス G と連携） 【 】『北海道博物館資料目録』刊行実施計画作成と執筆推進・編集・刊行 (2) 道民の「知りたい」気持ちへの支援 【ア】収蔵図書の充実 [年度末時蔵書数見込 153,000 冊程度] 【ア】図書ボランティア制度の運用 【イ】図書室の開架部分のレイアウトや表示等を工夫し一般来館者が気軽に利用しやすい環境を整備 [年間利用者見込 3,500 人程度（うち図書室のみの利用者 35 人程度）] 【イ】企画展示および総合展示の理解を深めるための図書展示コーナーの更新・運営（年間 6 回程度） 【ウ】各機関、個人からの問い合わせなどのレファレンス対応と推進 [年間見込 560 件程度] 【ウ】レファレンスの窓口一元化（ICT を活用したレファレンスなど）と効率化（よくある問い合わせ Q&A の開設など）による機能強化に向けた検討 【ウ】関係機関（道内外博物館、文書館、図書館など）との連携によるレファレンスの検討				
前年度との主な変更点		・令和2年度に情報システムを更新し、情報発信強化のための博物館情報の基盤整備を促進させる必要があることから、「収蔵資料データベースに登録する情報の拡充推進」、「収蔵図書の整理とデータベース登録」、「北海道博物館刊行物のスキャンによるアーカイブス化の検討」「収蔵資料データベース、収蔵図書データベース、刊行物アーカイブスの公開のあり方検討」を新たに頭出しし、重点項目とした。				
直近の協議会評価意見に対する取り組み		・道民の知的興味に応える博物館づくりにおいて、ICT 利用の情報発信能力の向上の対応を迅速にする課題がある、ネットワークを活かした情報発信力がまだ足りない、研究業績や研究プロジェクトの成果情報の発信を強化してほしい、博物館としてのプライオリティを高くした方がよい、との意見を踏まえ、博物館情報基盤整備を重点項目とした。				

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	鈴木琢也	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 協議会での情報発信強化の意見をふまえ、その基盤整備等を計画しており、適切な年度計画が策定されている。一方、新型コロナウイルス感染症の感染拡大によっては図書室の利用者数などが縮小する可能性も想定される。		中期目標・計画との整合性	a	
				年度計画の適切性	a	
				協議会評価意見の反映	a	
				実現の可能性	b	
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和3年4月15日	
	A	【意見】 今後の新型コロナウイルス感染症の感染状況の変化の中、事業の中止や縮小などの可能性もあるが、情報発信の基盤整備等の年度計画については概ね適切と判断される。				

令和3年度事業概要

記入日		令和4年7月24日	記入者	櫻井万里子（学芸部博物館基盤グループ主査、図書・情報発信）
業務責任者		学芸主幹	業務担当者	令和3年度博物館基盤グループ 【主査】山際秀紀（資料管理）、会田理人（展示） 【係】鈴木あすみ・亀丸由紀子・吉川佳見・大谷洋一
		鈴木琢也		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	・重点項目(1)アについて、収蔵資料の情報を広く公開し利活用の促進を図るため、「収蔵資料のデータ整備・収蔵資料情報の公開に向けた方針」「収蔵資料データベースのインターネットを通じた公開に関する方針」「収蔵資料データベース上の資料情報を新規公開するための手順」を策定。今後情報の更なる蓄積を図り、当館ウェブサイトでの公開及び他機関が構築したデータベースへのデータ提供を通じた公開を進めることとした。 ・令和3年度は方針に基づき、国内の自然史標本データ共有ネットワーク「サイエンスミュージアムネット(S-Net)」及び北海道環境生活部が令和4年3月に公開した道内博物館・美術館のポータルサイト「北海道デジタルミュージアム」へデータを提供した。また現在約1万件に留まっている当館ウェブサイトでの公開についても、データの整備（確認）を終え、著作権や肖像権、個人情報保護の観点から公開に支障がないものを順次公開していくための要領を定めた。 ・北海道博物館（旧開拓記念館、旧センター含む）刊行物（特別展図録、研究紀要、ニュースレター等）のスキニングによるアーカイブ化の検討については、既にデジタルデータがあるものと、新たにスキニングが必要となるものの確認作業を進めた。		
	達成・実現できなかった項目	・新型コロナウイルス感染症による来館者数の減により、レファレンス件数が378件と低調であった。また、一般項目(2)ウに掲げたレファレンスの窓口一元化と効率化による機能強化、関係機関との連携によるレファレンスの検討は着手できなかった。		
	当初計画になかった項目			
今後の対応策		・重点項目(1)アに掲げた収蔵資料の撮影について、館職員による撮影が困難な大型資料は外部委託による撮影を検討する必要がある。 ・重点項目(1)イに掲げた公開のあり方について、公開した資料情報が広く活用されるよう、他の都府県や道内の教育庁所管施設の動向も踏まえつつ、二次利用の手続き（模写品等承認等申請）の簡略化に向けた検討を進める必要がある。 ・一般項目(2)ウに掲げたレファレンスの推進、一元化と効率化、関係機関との連携については、まずは現状の記録項目の精査と館内における記録の集約及び共有化の方法を検討していく。		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	鈴木琢也	個別評価項目	個別評価
	B	【説明】 資料情報の公開を進める方針等が策定され、他機関との連携による資料情報の公開及びウェブサイト公開の道筋をつけたことは評価できる。レファレンスは業務の館内フローを確立する必要がある。取り組み中の項目はあるが、概ね計画どおり事業が遂行されたと判断できる。		事前評価に対する対応の適切性	b
				年度計画の達成度	b
				状況変化への対応の適切性	b
				今後の対応策の適切性	b
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	池田貴夫	評価完了日	令和4年8月24日
	B	【意見】 当館の資料情報システムならびにデータベースの管理と運用及びレファレンス等の運用は全体的に計画に沿って着実に進められており、協議会の指摘事項であるICT利用の促進についても意識的に取り組まれつつある。レファレンス体制・業務フローの検討や資料デジタル化の推進、資料情報公開の促進等の課題があることは一次評価記載のとおりであるが、R3年度の評価としては「B」が適切であり、指摘された課題は館として受け止め次年度以降の事業計画に反映させていくことが望ましい。			

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		13	所管 G	企画 G		
項目名		人材育成機能の強化と社会貢献				
計画策定担当者		学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		東俊佑	池田貴夫		0	0
予算計上						
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	【(3)】当館職員、とりわけ若手学芸職員の博物館に関する知識と技術力及び研究力を高め、将来の博物館機能の向上に結びつける。また、そのために必要な支援の拡充に努めるための検討。				
	一般項目	(1) 博物館実習生やインターンシップなどの受入れ 【ア】博物館実習生やインターンシップの受入れ [年間 15 人程度] 【ア】職場体験・見学実習の受入れ [年間 10 件、延べ 100 人程度] 【イ】高校・大学等のニーズに応じた当館職員の講師としての派遣 (2) 外来研究員の受入 【 】外来研究員(外部研究者や大学院生等)の受入に関する検討・取組・制度整備 (3) 当館職員の資質向上 【 】博物館学系研修会や技術研修会への当館職員の参加 [年間見込 10 件、延べ 20 人程度] (4) 職員の对外貢献 【 】招待講演(講座・講演会)等への職員派遣、各種委員・非常勤講師への就任、学術的な協力(指導助言等)、執筆依頼等 [年間 70 件程度] (5) 外部機関との事業連携 【 】他機関等との連携・協力 [年間 20 件程度] (6) 道民の豊かな暮らしづくり・北海道の未来づくりへの貢献 【ア】【ウ】アイヌ民族の歴史や文化、和人の歴史や文化、北海道における自然と人との関わり、そしてそれらを総括的に捉え持続可能な共生社会を模索する政策の推進 【イ】「北海道総合計画」(平成 28 年度～令和 7 年度)などとリンクし、北海道が抱える諸問題の解決、道民の豊かな暮らしづくりと北海道の未来づくりへと結びつく研究・博物館活動を推進				
前年度との主な変更点		・当館学芸職員 28 名(欠員 2 名)のうち 11 名は 2015 年北海道博物館開設後に採用され、勤続 7 年以下の若手職員であり、今後も順次世代交代が進むことが予想され、若手職員の育成は当館の最重要課題である。対外的な社会貢献の役割を果たすためにも、それを円滑に進めるための当館職員の人材育成は喫緊の課題であることから、重点項目とした。 ・博物館実習生の受け入れは、新型コロナウイルス感染症拡大対策の観点から、前所管 G からの引き継ぎで令和 3 年度は上限 15 名とした。				
直近の協議会評価意見に対する取り組み		・「外来研究員の受け入れについて、早期に実現されることを期待したい」との意見を踏まえ、早急に検討する必要がある(※ただし、予算を伴う制度となる場合の早期実現は困難である)。				

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	池田貴夫	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 若手職員の育成など、当館の課題が適切に盛り込まれている。オンラインでの研修参加を含め、計画を推進していけるものと判断した。对外貢献等においても、オンライン対応が普及しており、実現可能な計画と考える。		中期目標・計画との整合性	a	
				年度計画の適切性	a	
				協議会評価意見の反映	a	
				実現の可能性	a	
第二次自己評価	総括評価	総務部長	川田宣人	評価完了日	令和3年4月15日	
	A	【意見】 コロナ禍のため、例年通りの実績となるかは不透明な状況である。ただ、計画と自己点検評価については適切であり、例年通りの計画の実現に向けて実績を積み上げていくことが大切であると判断し、A 評価とした。				

令和3年度事業概要

記入日		令和4年7月22日	記入者	甲地利恵
業務責任者		学芸主幹 研究主幹	業務担当者	令和3年度企画グループ 【主査】山田伸一 【係】尾曲香織
		池田貴夫 甲地利恵		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	(1)【ア】 ・新型コロナウイルス感染症拡大に伴う臨時休館中の期間に重なり、受入れ人数を制限し、来館者のない中での実習となったが、そうした制約の中で実習プログラムを無事完了できた。特に大学での授業がほぼオンラインとなっていた学生たちからは、コロナ禍の中でも実地にモノに触れ、人と意見を交わし、学芸員から直接手ほどきを受ける機会を当館が提供したことについて、多くの学びを得る貴重な機会であったとして好評と感謝の意を伝えられている。		
	達成・実現できなかった項目	・重点項目として挙げた「当館職員、とりわけ若手学芸職員の博物館に関する知識と技術力、及び研究力を高め、将来の博物館機能の向上に結びつける。また、そのために必要な支援の拡充に努めるための検討」については、職員のキャリアプランを見据えた中長期的な研修等の計画検討が必要であったが、据置きのまま着手できなかった。 ・外来研究員（外部研究者や大学院生等）の受入に関する検討・取組・制度整備については早急に検討すべきであると認識していたが、年度前半は他の項目（たとえば博物館実習など）を感染症拡大下で安全に実施することを優先、後半は担当主査が年度末で退職することに伴う引継ぎや残務整理によりスケジュール変更せざるを得なくなったこともあり、この項目については達成できなかった。		
	当初計画になかった項目	・特になし		
今後の対応策		・職員の資質向上のための外部研修受講について、中長期的に実施していけるよう、各職員（特に若手）のキャリアプランも考慮した計画の検討・策定が必要である。 ・外来研究員の受入れに関する検討を、研究戦略グループほか関係グループとも連携しつつ、開始していかなければならない。		

【事後評価】

第一次自己評価	総括評価	研究主幹	甲地利恵	個別評価項目	個別評価
	B	【説明】外来研究員の受入れに関する検討の未実施は何年も持越されているものであり個別評価は「c」とせざるを得ない。一方で、新型コロナウイルス感染症拡大下でも対策を講じて博物館実習の機会提供、またオンラインツールなども活用して当館職員の講師派遣をできるだけ実施したことなどから、総括評価は「B」とする。		事前評価に対する対応の適切性	c
				年度計画の達成度	b
				状況変化への対応の適切性	b
				今後の対応策の適切性	b
第二次自己評価	総括評価	総務部長	島村哲也	評価完了日	令和4年7月22日
	C	【意見】 新型コロナウイルス感染症の拡大の影響の中、博物館実習を無事終了できたことは評価できるが、一方で、外来研究員の受入れに関する検討や、職員の外部研修受講計画に関する策定など、課題として挙がっている項目が進捗していないことから「C」とする。			

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		14	所管 G	研究戦略 G		
項目名		研究成果の発信				
計画策定担当者		学芸主査	学芸主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		大坂 拓	水島末記		599 (1,198)	599 (1,198)
予算計上		□北海道博物館試験研究費（研究成果の集約・発信）[599 千円] ※上記は、主に『北海道博物館研究紀要』の刊行費。 ※『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』刊行費は、北海道博物館事業費（アイヌ民族文化研究センター・調査研究）により実施 [599 千円]。→「15 アイヌ民族文化研究センターの事業」を参照のこと。				
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	【(1)】各種研究成果を『研究紀要』その他刊行物等を通じて効果的に発信していくための実施検討。				
	一般項目	(1) 学術刊行物などの刊行 【ア】『北海道博物館研究紀要』投稿原稿の執筆推進と編集・刊行（年間1回） 【ア】『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』投稿原稿の執筆推進と編集・刊行 【イ】職員の研究成果をわかりやすくまとめた刊行物等（叢書、新書、ブックレット、総合展示専門解説書等）の刊行の検討 (2) 学会への発信 【 】学会誌等、館出版物以外の出版物への執筆推進 [年間 35 件程度] 【 】学会、研究会等での発表推進 [年間 20 件程度]				
前年度との主な変更点		・中期目標・計画に照らし合わせて、「各種研究成果を『研究紀要』その他刊行物等を通じて効果的に発信していくための実施検討」、「職員の研究成果をわかりやすくまとめた刊行物等（叢書、新書、ブックレット、総合展示専門解説書等）の刊行の検討」を新たに追加。				
直近の協議会評価意見に対する取り組み		・とくに該当意見なし。				

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	水島末記	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 コロナ禍のため、出張をとまなう調査研究活動に支障の出る可能性はあるが、年度末の2つの『紀要』の刊行には影響はないものと判断できる。計画は適切につくられたと判断した。	中期目標・計画との整合性		a	
			年度計画の適切性		a	
			協議会評価意見の反映		a	
			実現の可能性		a	
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	堀 繁久	評価完了日	令和3年4月15日	
	A	【意見】 適切に計画作成、自己評価が行われたものと判断できる。				

令和3年度事業概要

記入日		令和4年7月1日	記入者	大坂拓（学芸部研究戦略グループ学芸主査・調査研究）
業務責任者		学芸主幹	業務担当者	令和3年度研究戦略グループ 【主査】大坂拓【係】舟山直治
		水島未記		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	・新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により計画どおりの調査研究活動を遂行できない研究プロジェクトが多かった中で、例年並みの内容・分量の『北海道博物館研究紀要』『アイヌ民族文化研究センター研究紀要』を刊行した。		
	達成・実現できなかった項目	（2）学会への発信 ・学会誌等、館出版物以外の出版物への執筆推進 [年間 35 件程度] →実績 7 件 ・学会、研究会等での発表推進 [年間 20 件程度] →実績 5 件		
	当初計画になかった項目			
今後の対応策		・道費による研究プロジェクト、科学研究費補助金等外部資金を活用した研究課題の研究成果については、今後も継続的に研究紀要等により成果を発信していくことが必要である。研究期間の間に成果が一つも掲載できないことがないよう、計画的に研究を進め、成果を発信していく必要がある。 ・「北海道とサハリン（仮題）」研究成果報告書を刊行する必要がある。 ・研究成果をわかりやすくまとめた冊子などの刊行の検討を進める必要がある。		

【事後評価】

【学会評価】						
第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	水島未記	個別評価項目		個別評価
	B	【説明】コロナ禍の中、例年並みの『紀要』を刊行したので「事前評価に対する対応の適切性」はaとした。オンライン開催が多くむしろ発表しやすかったにもかかわらず学会発表等は少なかったため「年度計画の達成度」「状況変化への対応の適切性」いずれもbとした。総括評価はBと判断した。		事前評価に対する対応の適切性		a
				年度計画の達成度		b
				状況変化への対応の適切性		b
				今後の対応策の適切性		a
第二次自己評価	総括評価	学芸部長	池田貴夫	評価完了日	令和4年8月24日	
	B	【意見】 新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により調査研究活動が制限されるなかでも、『北海道博物館研究紀要』および『アイヌ民族文化研究センター研究紀要』を充実した内容で刊行できたことは、評価すべきである。一方、学会への発信については不振であったことは、その要因を明らかにし、回復傾向へと導いていく必要がある。今後の対応策で記載した事項については、着実に実行へと導いていく必要がある。				

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		15	所管 G	アイヌ民族文化研究センター		
項目名		アイヌ民族文化研究センターの事業				
計画策定担当者		研究主幹	センター長	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		甲地利恵	小川正人		3,288	3,091
予算計上		☐ 北海道博物館事業費（アイヌ民族文化研究センター分）〔資料保存管理：1,630 千円、調査研究：1,182 千円、広報：279 千円〕 ☐ このほか、総合政策部計上の【拡充】アイヌ文化情報発信強化事業〔12,610 千円、財源：地方創生推進交付金、時限付き〕の一部を使用予定。				
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	【中期目標・計画／重点③】ウボボイ（民族共生象徴空間）とりわけ国立アイヌ民族博物館との連携を含めた北海道内博物館の活性化貢献に向けた検討・取り組み				
	一般項目	(1) アイヌ文化に関わる調査研究とその成果の普及 〈調査研究〉 【ア】【イ】 アイヌ民族文化研究センターが主体となって立案し実施する研究プロジェクトの推進〔道費による研究：2 課題〕 【ア】【イ】 北海道博物館全体で取り組む海外との共同研究等の研究プロジェクトへの参画と推進 【ア】【イ】 日本学術振興会科学研究費補助金など外部資金を活用したアイヌ文化関連調査研究の推進 【中期目標・計画／重点④】 北海道博物館で取り組む樺太記憶継承事業への参画（樺太連盟資料の受入と整理の開始） 〈資料の収集と整理・公開〉 【イ】 アイヌ文化に関する資料の収集と整理の推進 【ウ】 採録等による資料についての公開計画の策定とこれに基づく公開の実施（諸手続含む） 【イ】【エ】 アイヌ文化関係資料のデジタル化・情報発信の促進 〈研究成果の発信と普及〉 【エ】『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』の編集計画の策定と投稿の奨励・推進 【エ】 館内外における教育普及事業（講座、ワークショップ等）を通じた研究成果の発信や理解促進・教育普及の取り組み 【エ】 当館における企画展示の立案・実施（第 18 回企画テーマ展（アイヌ工芸品展）を予定） 【エ】 当館における展示資料の入替及び総合展示内クローズアップ展示の更新 【エ】 道内市町村と連携・協力した「アイヌ文化巡回展」の開催（幕別町、長万部町） 【エ】 アイヌ文化紹介小冊子『ボン カンピソシ』（全 1～9 巻）の増刷・配布〔都度実施〕 【エ】 広報誌『森のちゃれんがニュース』の「アイヌ民族文化研究センターだより」などを通じたアイヌ民族文化研究センターの活動に係る情報の発信 (2) アイヌ文化に関する学術情報の集約と発信・研究支援 【ア】 アイヌ文化に関する学術情報（収蔵資料データ、調査データ、文献情報等）の集約 【ア】「アイヌ語アーカイブ」など当館ウェブサイトにおける情報発信 〈対外支援・社会貢献、博物館等のネットワーク〉 【イ】 市町村やアイヌ文化伝承活動団体等からの、アイヌ文化の学習や伝承活動、展示等の事業に関する依頼・照会に対する、専門的見地から助言・支援・協力等。 【ア】 国立アイヌ民族博物館によるネットワーク事業への参画				
前年度との主な変更点		・ 特段の変更はなく、前年度に引き続き、中期目標・計画に基づき個別の事業の年度計画を策定し実施する。				
直近の協議会評価意見に対する取り組み		・ 資料・情報の収集整理、発信、公開などの遅延、目標設定と計画設計の見直しについての評価意見を踏まえ、資料整理については、年度当初に課題と計画を検討する場を設け、担当の分担及び整理・公開等のスケジュールや期限をより明確にした計画をたてるようにした。 ・ 国立アイヌ民族博物館との連携や役割分担に関する指摘を踏まえ、同博物館を中心とするネットワークへの参加など、意見交換の機会を広げている。				

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	研究主幹	甲地利恵	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 感染症拡大下で出張を伴う調査等の時期についてはなお流動的であるが、柔軟な変更が可能なように個別の研究課題や担当資料の整理作業等、具体的な計画の立案と検討を図り、進めていける見通しである。			中期目標・計画との整合性	a
					年度計画の適切性	a
					協議会評価意見の反映	a
					実現の可能性	a
総括評価	センター長	小川正人	評価完了日	令和3年4月15日		
第二次自己評価	A	【意見】資料の整理・公開（特に音声・文書資料）について分担と期限の明確化を図り、アイヌ語関係事業について改めて充実を期す等、昨年度までの課題の解決に向けた取り組みを開始している。またアイヌ民族文化財団のアイヌ工芸品展を当館第 18 回企画テーマ展として開催する計画であり、特に民具担当には相当の業務負担も予想されるが、この間の調査研究の成果としてぜひ計画とおりの開催を期したい。新型コロナウイルスの先行きの不透明さ等の不安定要素も懸念されるが、全体として、これまでの課題の解決を図りつつ事業の充実を期せる計画と評価する。				

令和3年度事業概要

記入日		令和4年7月22日	記入者	甲地利恵
業務責任者		センター長	業務担当者	令和3年度アイヌ文化研究グループ： 甲地利恵・遠藤志保・大坂拓・亀丸由紀子・吉川佳見・大谷洋一 佐々木利和・奥田統己
		小川正人		
取 り 組 み の 状 況 と 実 績	とくに 評価すべき項目	・第18回企画テーマ展（アイヌ民族文化財団令和3年度アイヌ工芸品展）「アイヌのくらしー時代・地域・さまざまな姿」を当館職員が運営委員会の中心を担って開催、図録でも編集・執筆の中心を担った。アイヌ民族の歴史と文化を重ね合わせるテーマ設定と内容構成、資料選定とその解説、コラム等が高い評価を得た。当館では約2万人、巡回した群馬県立歴史博物館でも約1万1千の来場があり、アイヌ民族の歴史と文化に関する理解の促進に寄与した。 ・第10回アイヌ文化巡回展（幕別町）は、当初の開催期間（5月）中に新型コロナの感染急拡大のため急きょ中止となったが、幕別町教育委員会の尽力により2月に再開することができ、関連講座の実施と併せて地域でのアイヌ文化理解促進事業としての役割をより充実させることができた。 ・「アイヌ語アーカイブ」で、アプリケーションのサポート終了に伴い休止していた音声視聴サービスを年度末までに再開させた。 ・国立アイヌ民族博物館との連携・協力について、ネットワークの運営委員会のほか、博物館の運営委員会・同展示ワーキング会議・学術交流ワーキング会議への委員の派遣、展示事業への協力（資料調査協力、資料貸出等）を実施し、道内博物館の活性化に向けて連携・協力関係の強化に取り組んだ。		
	達成・実現できなかった項目	・（1）「北海道博物館全体で取り組む海外との共同研究等の研究プロジェクトへの参画と推進」については、カナダ（アルバータ）、ロシア（サハリン）とも、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により研究交流等を見合わせたため、実施に至っていない。 ・当年度は上記のとおり多くの事業に取り組む成果を挙げたが、一方で計画段階から職員の業務負担の過多について懸念があり、実際に7月から3月まで関係する職員には業務の輻輳する状態が続いた。グループ内での業務分担等の調整で対応を図ったが、引き続き業務マネジメント上の課題である。		
	当初計画になかった項目	特になし。		
今後の対応策		・資料整理については前年度事業への評価意見をふまえて年度当初に課題と計画を検討し、それぞれの分担やスケジュールや期限を明確にして実施している。今後はこの計画を定期的に適宜見直ししながら、資料整理を確実に進めていく。 ・国立アイヌ民族博物館ネットワークをはじめとする連携や、ほかの道内の各博物館との連携・協力をいっそう進めていく。 ・職員の研究計画の円滑な実現を図るため、研究計画の検討とあわせ実施過程の注視を図る。		

【事後評価】

【事後評価】							
第一次自己評価	総括評価	研究主幹	甲地利恵		個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 国立アイヌ民族博物館との連携を進め令和３年度の重点項目を達成できたこと、年度計画として挙げた企画テーマ展がコロナ禍下にも係わらず無事に達成され好評を得たことを特に評価すべきと考え、総括評価はＡとした。			事前評価に対する対応の適切性	b	
					年度計画の達成度	a	
					状況変化への対応の適切性	b	
					今後の対応策の適切性	b	
第二次自己評価	総括評価	センター長	小川正人		評価完了日	令和４年８月２４日	
	B	【意見】 多くの業務をほぼ計画どおり実施していることから「Ｂ」評価に該当し、一部については「特に評価すべき」に期した成果を挙げていることからより高い評価も十分考えられるが、なお達成していない課題があること、「今後の対応策」に記載のとおり研究計画のより円滑な実施を図る課題も意識すべきことから、これらの課題を明確化する意味で総括評価を「Ｂ」とする。					

令和3年度 博物館評価調査

中期目標・計画番号		16	所管 G	北海道博物館 (企画 G)		
項目名		4つのビジョン (重点目標)				
計画策定担当者		主査	主幹	所要見込額 (千円)	前年度	当年度
		東俊佑	池田貴夫		6,508	6,289
予算計上		☐ 【新規】樺太記憶継承事業 [6,289 千円、財源：基金繰入金、時限付き (15 年間)] ※ウポバイ・国立アイヌ民族博物館との連携については、総合政策部計上の【拡充】アイヌ文化情報発信強化事業 [12,969 千円、財源：地方創生推進交付金、時限付き] の一部を使用予定				
年度計画	重点項目 (重要性・緊急性)	【中期目標・計画／重点①】「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」の具体的検討 →総括 G が所管し、企画 G、道民サービス G などと連携して取り組む 【中期目標・計画／重点②】道民参加型の活動の推進 →企画 G (道民参加の推進) が所管し、博物館基盤 G、道民サービス G、研究戦略 G と連携して取り組む。 【中期目標・計画／重点③】ウポバイ (民族共生象徴空間) とりわけ国立アイヌ民族博物館との連携 →アイヌ民族文化研究センターが所管し、企画 G (博物館ネットワーク) などと連携して取り組む 【中期目標・計画／重点④】樺太 (サハリン) に関わる資料の収蔵・保管、調査研究、展示活動を推進する「樺太記憶継承事業」の推進 →研究戦略 G が所管し、博物館基盤 G、各研究 G などと連携して取り組む。				
	一般項目	/				
前年度との主な変更点		・とくになし。 ※重点項目の各項目について、「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」は「7 施設及び周辺環境の整備」、道民参加型の活動の推進は「10 道民参加の推進」、国立アイヌ民族博物館との連携は「15 アイヌ民族文化研究センターの事業」、樺太記憶継承事業のなかの資料の保管・収蔵は「1 資料の収集・保存」、調査研究は「3 調査研究」、展示活動は「2 展示」でそれぞれ評価する。				
直近の協議会評価意見 に対する取り組み						

【事前評価】

第一次自己評価	総括評価	学芸主幹	池田貴夫	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】 令和2年度事業を継承発展させる観点から計画がつけられたものと判断できる。	中期目標・計画との整合性		a	
			年度計画の適切性		a	
			協議会評価意見の反映		a	
			実現の可能性		a	
第二次自己評価	総括評価	総務部長	川田宣人	評価完了日	令和3年4月15日	
	A	【意見】 第2期中期目標・計画期5か年のなかで個々の取り組みの実現が図られるものと判断できる。				

令和4年度事業概要

記入日		令和4年7月18日	記入者	東俊佑（総務部企画グループ学芸主査・企画調整）
業務責任者		学芸主幹	業務担当者	業務の運行管理：企画 G ※4つのビジョン（重点目標）は、博物館職員全員で取り組むものである。
		池田貴夫		
取り組みの状況と実績	とくに評価すべき項目	・「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』構想」実現のため、「野幌森林公園エリア活性化事業」を実施し、森のちやれんが 50 周年記念事業としてフォトコンテスト、ショートムービーの制作、「たてものみどころガイド」の制作、特別イベント、『北海道のニシン漁と青山家―旧青山家漁家住宅の魅力』の刊行、公園内の案内看板の設置更新などの各種事業に取り組み、北海道博物館の建物や野幌森林公園エリア全体の PR を行うことができた。		
	達成・実現できなかった項目	・特になし（新型コロナウイルス感染症の感染拡大により当初計画どおりに進めることができなかった個別事業などもあったが、全体としては概ね達成・実現することができた）。		
	当初計画になかった項目	・特になし。		
今後の対応策		・「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』構想」の実現に向け、具体的な事業の検討を行うことが課題である。		

【事後評価】

【事後評価】						
第一次自己評価	総括評価	研究主幹	甲地利恵	個別評価項目		個別評価
	A	【説明】新型コロナウイルス感染症拡大の影響で重点②などはあまり進捗させられなかったものの、重点①にかかる「森のちやれんが50周年記念事業」は当館や村の建造物それ自体の魅力を伝えるものとして実現できており、好評も得ていることから、総括評価としては「A」とした。		事前評価に対する対応の適切性		b
				年度計画の達成度		a
				状況変化への対応の適切性		b
				今後の対応策の適切性		b
第二次自己評価	総括評価	総務部長	島村哲也	評価完了日	令和4年7月22日	
	A	【意見】 新型コロナウイルス感染症拡大の影響で実施できなかった事項もあるものの、とくに重点①については館内外からの評判も高く、道民の「知りたい」気持ちに応える事業となったことから「A」とする。				

